

ひまわりからの メッセージ

82号

2018.3.12

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人: 中野にみ子

フロとして……



先日、岐阜県発達障害支援センターのぞみに勤務されていた加藤永歳先生の送別会があって出席しました。加藤先生には応用行動分析の講座やペアレントメンター研修などでお世話になりましたが、別れに際して、もっともっと学ばせていただけたはずなのに……と悔いのみが残りました。

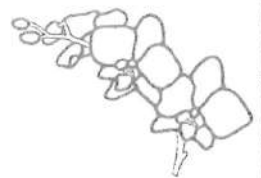
その会で隣り合った元特別支援学校の校長先生が「私は、児童発達管理責任者（放課後等デイサービスなど児童通所施設における支援計画作成の責任者）の講習で、中野先生の話は心に残りました。でも、若い子たちはちょっとびびっていましたよ」と、おっしゃいました。そして「子どもにかかわる者として当然のことですが、先生は厳しかったですから……。」と……。「えっ、私もこれでもやさしいつもりなんですけど……。」と応えましたが、本当のところは、きびしいのかもしれない。

園から小学校、小学校から中学校への引きつぎ会に同席させていただく、申し訳ないのですが、先生方のお子さんへの理解度や関わり方が見えてしまいます。「小学校では、〇〇と△△と□□の支援をお願いします」と、要望ばかり出される保育者もいろいろいますが、同席した保護者に「要望通りやってもらえん」というようにとうえられると大変です。園でできることが学校でできるとは限りません。また、「四月当初は〇〇ができませんでしたが、今ではできるようになりました」と、ご自分の実践の結果を報告される先生もおられますが、受ける方は、どうしようもありません。引きつぎ会は、要望の場でも、実践をひけらかす場でもないのです。その子の特性をしっかりとつかんで、「この子の困り感は何」という点にあって、私は支援として〇〇や△△を心がけてやってきました。〇〇は支援法として良かったと思いますが△△は、この子には良くないと思います。将来に向けて、□□の力をつけていつてほしいのでよくお願いしますが本来の「支援の引きつぎ」です。フロというのは、その道で給料をもらっている人のことだと私は思っています。フロである以上、常に学び、反省し、自己に厳しくあらねばならないのではないだろうか。

庭に咲きはじめに花々に子どもたちを重ねて観ていますと、一人ひとりをしっかり見つけ、その心の声を聴き、寄り添いつつ、社会に生きていく者としての見識を育んでいくことの大変さを感じるのです。子どもたちに関わるフロとして……。

人権差別

そして合理的配慮



三月も中旬をすぎ、暖かくなった土曜日に、どうしても行きかけたので、岐阜までホロコースト展に出かけました。

最初のコーナーには、ナチスドイツがユダヤの人々の大量虐殺にいたる経緯と写真、生き残った人々の描画や文章が展示され、次のコーナーには、『アンネの日記』のアンネの写真や手紙、そして命のじやで有名な杉原千畝の紹介やじや、千畝を助けた日本人、敦賀の人たちのことも紹介されていました。そして、最後のコーナーでは世界各地で今も残る戦争やテロ、ヘイトスピーチなど人権や差別について考えさせられる内容でした。会場は年配の方が多く、文章をじっくりと読んでいらしゃるので、なかなか次の展示に進めませんでした。『ひどいね』『人間のやることじゃないね』『こんな国に生まれなくて良かった』等々と耳に入ってくることは、少なからず異和感をもちました。

人は、どこまで残酷になれるのでしょうか。私たちは自分だけはそのうならないと思っていますが、本当にそうでしょうか。確かに人を殺めることはないかもしれませんが、ことばの暴力や差別など、自分が意識していない所で他の人々の人権を犯してはいないでしょうか。

「障害者差別解消法」は制定されましたが、身近なところで様々なことが起きています。地域で生活するためにクルー・プホームを建設しようとする、住民の反対運動が起きて、計画が白紙になったということもあります。学校でのいじめはまだまだ根強く残っていますし、保護者が「うちの子とは遊ばないで」と言ったり、近所の人が通学路に立って障害をもっている子を罵倒したりということも実際に起きていることです。

もちろん、根底にあるのは、障害をもつ子どもたちや大人の人に対する理解のなさですが、自分の家族や子どもを守っていくべきだと考えて排他主義に走っていく人たちが少なからずいるのだということも思い知らされるのです。

そんなふうに考えてみると、ホロコーストのような大量虐殺はないけれども、一般の普通の人の心の中に人権無視や差別といったことが存在していると言えそうです。そしてそれは、各々の人の利害とも大きくかかわっているのかもしれない。

私は、最近、園や学校での合理的配慮ということに関しても疑問に思うことがあります。例えば、発達年令が三歳という子が保護者の都合で通常学級で学ぶことになったとします。では、その子に四六時中支援員をつければ、その子の教育を受ける権利は保障されるでしょうか。それは、ちがうのではないかと思います。過度な配慮は時として子の自立に程遠くなります。

また、遂に学校での先生方の合理的配慮については、やはりその子の発達特性を知りその配慮が必要でしょう。

言語的推理の弱い子に……

ある検査に「片手に三本ずつ鉛筆をもつと……」という問題があります。「むっ」って何でしょう？ 辞書を引けば意味が書いてありますが、ますます混乱しそうです。でも、そういうことで困る子がいるということもご存知なのでしょう？

「マスの中に二つずつ〇を書いて……」と言われても分からない子を叱ってみても始まりません。前列の先生の目の届く所において見本でも見せていただけると助かります。一番後ろの席に座らせておくことが合理的配慮かどうか……考えるまでもありません。

「一回目の目って何？」「まだありますって、どういうこと？」

等々、算数の文章問題が苦手な子どもたちが、どうしてつまづいてしまうのか、それをどの様に教えた方がいいのか、考えていただけるといいなあと思っています。

席はどこがいいのか？

引きつぎ会をしていると、保護者の方は「前の席に……」と言われるます。先生方も配慮を要する子たちを前の方に置いていたにんことが多いと思います。しかし、友だちの様子を見てから行動に移すような、自信のない子は、少し後にしていただけると助かるでしょう。

「隣の席には、しっかりした子をつけますので……」と言われるけれど、「ここ、まちがってるよ」「早く直して……」等と言って、消しゴムを使って消してくれようかな親切すぎる（？）友だちは、よいにイライラしてしまう可能性があります。各々、お子さんによつて違います。さり気なくノートを見せてくれるやさしい子が良い場合の方が多いはずです。

そして、実は隣になつて、先生に「お願いね。」と言われた子の方が心も病んでしまうこともあるので要注意です。本来、先生がすべきことも、子どもの責任にしようのは、ちょっと考えものです。

教室は、すっきりして……

子どもたちの中に、視機能の問題をもつ子や、不注意な子、おちつきのない子がたくさんいます。私たちが聞こえるもの、見えるものの、気になる物などは万人が共通ではありません。感覚入力の人それぞれに違い、その反応もちがって当然です。落ちつきのない子や不注意の子を担任したり、まず、教室環境を整えて下さることを思います。背景から必要なものを見つけられない子に、板書字が遅くなるのは当然です。前面の掲示物が少なくなるだけでも助かる子はたくさんいます。それも、合理的配慮の一つですよ？ 子どもたちが過ごしている室、教室、どんな環境でしょうか？

発達障害の子の困ることは山ほどある!!

◎テストの時、わからない問題があると、先に進めない!

私たちは、わからない問題があれば、そこをばしめて次に進みますが、それができなくてイライラし、暴れたり、大声を出したりしてしまいます。子どもたちにとっては、大変なことなのです。

先に「問題がわからない時は次の問題に進みましょう」というメッセージを書いておいていただくのも一つです。

◎話の途中で全く関係のないことを話し出してしまふ。

そんな時は、「今、その話をしています」と言われたり、「黙りなさい」と叱られてしまいます。学級での学習の最中に、そういうことが多い場合は、あらかじめクラスのルールとして、「授業のときに勝手に話しません。話しても先生は応えません」ということにしておきましょう。少人数のクラスや休み時間の場合や家庭では、「そう、〇〇と思ったのね」と一応、その話を受けてかう、「今、何の話をしていたの?」と気づかせましょう。それでも気づけずに自分の話を続けるようであれば、その時は話を止めてその話は、後にしましょう」と言ってみてください。

子どもたちは話を聞いていないのではありませんが、話の途中で何かひっかかることはあったり、興味が多くなってしまったりするので、むやみにことを否定されると不安定になります。

◎頭ではわかってても体や手足の動きがわからない。

考える力はあるのに、不器用な子は、具体的にどの様に手足を動かせばいいのか分かっていません。だから、「やりたくない!」「めんどうだ!」と言って逃れようとし、失敗したくないのです。でも、やらないでいると、ますます苦手になっていくし、無理にやらされて失敗して、よけいに体を動かすことがいやになっていきます。発達性協調運動障害だと言われますが、家庭でお父さんやお母さんがかわって遊ぶことで、トレーニングにはない楽しさを味わえるのではないかと思います。

◎自分ルールにこだわって活動が終われない。

私たちだって、こだわることはあります。でも、気持ちを切りかえることが苦手な子は小さい時から、本人の思い通りにさせておくのではなく、先を見越して「おわり」を教えていきましよう。最初は泣きわめくこともあるでしょうが、叱ったり大声を出したりせず、大人が普通の声で「おしまいね」と教えていくことが必要です。



お知らせ

四月例会・四月十六日、奥の細道記念館にて